

エ
ス
プ
ラ
ネ
ー
ド
を
こ
う
読
む

増刊号「エスプラネード」ありがとうございました
幻と現実のりりまじるエスプラネード散策面白く読ませて
りましたきまりました

笠野頼子さんや津島佑子さんの作に通じるものがある
ように思いました

欲を言えば最後が少し唐突に思われました

現実げなれーたことが時々起ります。作者の(主人公の)
「打撃などが起くるのは私も先がないのかもしれない」
「認知症とはこんなものかもしれない」

という言世不で否定されず、主人公は正常です
これを否定せずそのままにしており、読者を

「主人公は妻の死で狂ったのか」「認知症なのか」

と迷わせ、最後に「そうだったのか」と安心させてもよかつた
のでは、と思いました

個人的な感想ご参考までに

◆A様：神戸エルマール文学賞基金委員会理事

・大阪女性文芸協会理事

・文芸同人誌同人

①

②この度は、貴著書「エスプラネード」をお送りくださりまして、誠にありがとうございました。早速読ませて頂きました。まず、原稿用紙にして60枚を超える力作に感心しました。

さて、昨年私も60歳になり、国民健康保険や運転免許証の更新で高齢者扱いを受けるようになりました。そのためもあって、貴小説の主人公の気持ちがよく理解できます。また、考えさせられる所も多い訳です。

主人公は1963年に大学を出て、25歳で従業員200人ほどの大和金属に就職し60歳の定年まで勤め上げます。しかし、中小企業での唯一の大卒でありながら、最後まで課長（管理職）になれず、サラリーマンの悲哀を味わいます。先代の社長が存命中は信頼されそれなりに力量が認められていたが、息子が社長になってからは、社長の先輩が主人公の上司である課長となり、主人公はさらにつらいサラリーマン生活を余儀なくされます。この辺のサラリーマンの悲哀、また家庭生活がよく書けていると思います。この辺は、多くの会社サラリーマンの共感を呼ぶところでしょう。最後が少し分かりにくいのですが、この小説は、胃がんは克服した主人公が定年退職後、脳梗塞を患い、次第に認知症になり、悩んだ末に75.6歳の時に妻の助けを借

りて死ぬ前の数分間に、彼の頭をめぐる回想を描いた形式になっているのですね。妻は実際には死んでいず、主人公に付き添っていると、解釈しました。この辺のどんでん返しも面白いですね。また、本文中の現在時点と過去の回想、死んだことになっていいる妻の発言など、なかなか巧みで、胃がんの手術の時に病院で知り合った老人が後で出てくるところも、うまいです。ただ、あえて言えば、大和金属で数少ない大学卒でまじめで仕事もできた主人公が、課長にもなれなかつた所は、やはりアリテューに欠けるのではないかと私は感じました。1960年代と言えば、まだ大卒に行く人は20%足らずで、中小企業では高く扱われたと考えるからです。もちろん、色々なケースがあるでしょうが、日本は今以上に学歴社会であつたと思います。(正直に言つて、会社生活中、高卒の人から、私はいやと言うほど学歴による差別に対する恨みを聞きました。私から言えば、能力の差だと反論したかつたのですが) この点は作品の良さとはあまり関係しません、感じた所を申し上げました。とにかく、大変面白く読ませて頂きました。いつも、貴作品の文章の良さには感心しています。ありがとうございました。

B様・文芸同人誌同人・神戸エルマール文学賞佳作受賞

③ 「エスプラネード」とは何？あまり日常聞き慣れない語で、早速、カタカナ語辞典にお世話になる羽目になりました。難しい題だったので、のっけから面食らいました。2回、3回と読み直しましたが理解しにくい場面があちこちにあり、初めのうちにはストレートに入りませんでした。仮想・空想の世界と現実の世界とが行ったり、来たりの意味がやっとわかりました。いろいろなむつかしい場面転換も多くありました。貴方の場合よく会社勤務の話がでてきますが、前半は少し退屈でした。（感じたままでご容赦を）そういった場面については私自身あまり興味、関心がないうようです。ジャンルが少し異なるようです。後半、やっと、なんとなくですが表現の意味を理解することができました。時間がかかりました。

C様・元小学校長・文化連盟理事

暦の上では春の到来となっておりますが、まだ厳しい寒さが続いております。お変わりございませんか。

さて、『エスプラネード』をありがとうございます。

前期高齢者三年目となりますと、物語の展開に、これまでの生きてきた背景こそ違いますが、共感する面が多々あります。構成において、幅広い情報と知識の裏付けがあることに感心しております。なかでも、今、桜宮高校の体罰が問題になっておりますが、登場人物安達の描写が、今回の問題と大いに関連しているように読みました。

これからの老老後の夫婦のあり方や、人が最期まで生きるという意味は何なのかを考えさせられました。ありがとうございます。

時節柄、偽自愛くださいますようお願い申し上げます。

⑤ 「エスプラネード」 拝読いたしました。78枚の力作、75年間の人生を誠実に生き抜いてきた一人の男の臨死体験が、幽体離脱という形で描かれていた、と解釈いたしました。最も感心させられたのは、西藤江界隈の風景描写でした。(P6・7) この描写と相まって描かれた、妻への感謝の気持ち、子育てと子供の成長、自身の命にかかわる病気のこと……。同僚の安達への憎しみ、矢部さんの戦争体験もリアルに描かれていました。

タイトルをはじめ、他にもさまざまな外国語（ホリゾンブルー・スチールグレイ・バーガンディ色・コチニールレッド等）が多用されていますが、これは、小説全体に関わる効果を意図されたことなのでしょう。読後、洋画でヒットした「ゴースト」を想起しました。周囲の人には全くその姿を見られずに、恋人のために勇氣ある行動をとる一人の男の物語。

E様・「アクトス」同人

⑤ 返信

おっしゃるとおり一人の男の臨死体験・幽体離脱です。外国語（ホリゾンブルー・スチールグレイ・バーガンディ色・・・）の色の多用も言われるとおり故意です。私はどうも描写が拙いので、色を使うことで場面や心理が見えるのではないかと思いました。服装と色彩で読み手に場面が見えるそうです。

リアリズムで書くのは苦手なのです。といますのは自分の気持ち在上手く表現できなくて「ぶつとんで」の視点から書いてしまいます。この頃歳とともに「書けるかな」と思い出しましたのは、自分に正直になりつつある気がするからです。とはいえ、本質は「童話」「SF」が好きなのです。

⑥ すごいなあ・・・

洒落たフランス語？

かと、

ググってみました。

海岸べりの遊歩道、平坦な道という言葉。

F様・「アクトス」同人

「ふむふむ」

⑥ 返信

「エスプラネード」って、そう、フランス語風ですね。しかし、英語なんですわねえ。遊歩道にしようかと思いましたが、或いは「道」、または、平坦な道、とも考えました。が、なんだろうと調べるほどが良いのではないか、また、なんとなくフランス風で、夢のような内容とあうのではないか、と言うことで落ち着きました。入り組んで前後が判らなくて、最後になつて「ああ」と納得してという方もおられました。形而上のお話ですから、それを全く考えられない方は、あわない、と思います。

⑦ 「エスプラネード」読ませて頂きました。うーん、本当に悲しくて、寂しいお話ですねえ。“エスプラネード”という言葉、私は初めて聞く言葉だったので、思わず広辞苑をめぐってみましたが、見つかりませんでした。

G様・大学図書館司書

⑧ 老いをテーマに書かれていますね。明るいですね。現実はその訳にはいきませんが。西藤江は林崎松江海岸駅から北の方かなと思って読ませていただきました。上司のことなどを織り交ぜながら、物語の運びが上手いなと感じました。

H様・「アクトス」同人

⑨ 藤江の駅前には麦畑で、近くの浜辺には松林があつて、魚つりを兼ねてキャンプをしたことがあります。読者のわたしが二十歳ごろだったから、もう五十年も前のことです。それ以来、藤江で降りたことがなかったから、この作品では開発されて町になつてしまい、様子が変わってしまったのだな、と思いました。

しかし、この小説では、開発された町も人口が減つて衰退している印象もあります。若者はどこへ行つてしまったのだろう。まず最初、はかなさというものを感じながら読みました。

主人公の私は、ふと昔が懐かしくなり西藤江駅を降りて東へ歩いている。この道には定年退職まで勤めた会社もあり、妻と過ごした思いでもある。

妻は最近亡くなつたが、気のいい女だった。歩いている私の心の中に生前の妻が現れ、話をしながらになる。話は現在のことであり、五十年もタイムスリップしたりする。それはどの時代であつても、夫婦は仲がよく愛し合つていたことがわかる。

過去と現在を行き来しながら話が進む。真面目でおとなしい主人公が、永年勤めた会社を愚痴る場面があるが、どうして定年まで辛抱したのか、を考えた。P15あたりからおよそ6ページに渡つて、出世もできない同族会社に勤めたバカバカしさがあるが、主人公は大学を出ている、仕事ができる、がささやかなプライドで、子どもを養つていかななくてはならない、というのが大

きな弱みだ。

社長のバレー部の先輩が主人公の上司として出て来る。この人のことを女々しい人だときき下ろしているが、彼には彼の弱みがある。主人公も自治会の役員さえたことがなく、公的に役立つという気もない。みんな女々しいところがあるのに他人を責めたがる（自腹を切ることもあるが）。この作品の面白さは、狭い夫婦間では幸せだが、広い社会の中ではボヤキが多い。人間の身勝手さを認知症にかこつけて、女々しさを表わしたのかなと思いました。

作者の意図と全く違う感想かもしれませんが、お許しください。
気になったこと。

P 7・二百人ほどの従業員P 5 1・二百人足らずの会社P 5 3・二百人足らずの会社（他にも重複あり）P 2 6・ビジネスで行きたかった⇨仕事で行きたかった？またはビジネスクラス？P 4 0・すつと行きたいですが⇨すつと逝きたい？

I 様・文芸同人誌同人・神戸エルマール文学賞受賞

⑨ 返信

受賞作のあとがきに、S先生から「読んでわかる文章を書け」と言われたとありましたが、その通りだと痛感しています。

みんな持つ女々しさ、人間の身勝手さを認知症にかこつけて書いたのだなあと、指摘を受けて初めて思いました。恐らくその意図はあったのでしようが、主人公（つまりニアリーイコール私）は「自分は女々しくくない」と思っていますから、滑稽なことでは。人間は総て内心は女々しいのでしょうか。迂闊なことでは。また、「二百人」は強調する意味もあつたのですが、表記の揺れとあわせて見直します。「ビジネススクラス」の意図が通じていないのでこれも書き直しました。「逝きたい」はその通りで、さうとう見直したつもりですが、抜けているものです。これからは同人仲間とか編集者に添削・校正を頼まねばなりません。

同人誌

小説では、多様な人生が語られ、読者の想像世界を膨らませしてくれる。『I・K・I・G』45(和歌山県高野町高野山757・田寺方)宇江敏勝鹿笛は、民話的な幻想を感じさせる作品だ。主人公作治と親子ほど年が離れたイシは、生業として川鮎や鹿などを捕り、山に棲む。ふたりは気が向けば昼夜の別なく(ほたえ)(橋交し)、自然に溶け込んで生きていく。

鹿笛たちは陰暦8月の中旬から11月ほど繁殖期を迎える。男鹿は遠くまで響く透明な声で女鹿を呼び、存在を誇示し、女鹿は男鹿を誘って低く短く鳴く。作治は鉄砲と弾薬を出し、「笛山」という狎に使う女鹿の鳴き声を真似て男鹿を誘い出す

人間の本能の危うさ描く 独特の設定と意外な結末

鹿笛の調子を確かめる。イシは鹿の笛の音のせいか、激しく作治を求め。男鹿は一度、作治の鉄砲から逃れるが、鹿笛の魔力に再び現れて仕留められる。男鹿の本能のなせる深い業に、作治も年甲斐もなイシの懸念とつられる自分を知る。激しい風雨に吹き飛ばされる。本能と重ね、人間の本能の危うさを描く叙事詩的好構構だ。『アクトス』臨時増刊号(明石市宮の上1の17の614・大西方)大西亥一郎「エス・フランド」は、独特の設定、構成で描かれた奇みな作品だ。短編小説は「夫の視点で書くのが惜しいが、軽

な幻影を見ながら何かおかしいと思いつつ歩く。その遣はへま、しゃあないかと生きた私の、人生のエス・フランドでもあやう。そして意外な結末で終わる。諦めを感じる人生をセミトキユメンタリー風の手法で描いた秀逸な作品だ。『書中文学』34(大阪府豊中市西町南3の2の38・益岡方)内田翠子君よ知るや南の國の主人公「わたし」は、学徒出陣で戦死した彼の回想にふけり砂浜で転倒、骨折し、入院する。わたし、病院で知り合ったケアマネジャー、元フイリオンネで合は日本人のオートライイと山口踊のあたり

の人生が、鮮やかに記憶に残る作品だった。(野元正・作家)

エス・フランド

大西 亥一郎

鹿笛

宇江 敏勝

自宅から約4kmにわたる。過去にまつわるエス・フランド(遊技道)で回想にあり、亡くなったはずの妻が時々現れて会話を交わすなど、多様

※上は神戸新聞の同人詩評です。
褒めていただいて大変嬉しいです。
自分なりに考えたことは次ページ以降にも書いてあります。
取り上げていただき、褒めていただく意欲につながります。有り難いことです。

◆3月中旬までにいただいたご批評・感想をほぼ到着順に記載したものです。それぞれに返事をさしあげました。○赤丸の番号はいただいたもので、○青丸は私の返事です。重複しているもの等は省きました。お名前はイニシャルではなくてABC順です。肩書きも省略形です。最後の神戸新聞は同人の方から「載っている」とお知らせいただき慌てて加えたものです。

作品を読まれてご自分が感じられたこと、気がつかれたことと、ここに書かれている内容を比較されると、「読まれ方」が判ると思います。それは「書き方」につながるわけです。アクトスの合評会での話の参考にもして欲しいと思います。

書き手が反応のどの部分を取り入れて、何を受け入れないかというのは、最終的には書き手の感性にマツチするものを受け入れるというのが判断基準になると思います。

私が拝見していて「うん、これは直さねばならない」と思ったのはA「結末部分で判ることを、例えば幻影であった、と言うことを先に書いてしまう」B「前半が退屈」C「大卒が出世できなかつたことの理由の強調不足」などでした。

それを訂正していくのですが、Bなどは、「この退屈さが後半につながるのだが・・・」と未だに思案していることもあります。

また、この行きつ戻りつ、幻覚と現実のお話は、この感性と違う感性をお持ちの方には理解できないと思います。形而上のことは理解不能とか、或いは認識できないという方もおられるので、これは仕方ありません。もちろんこと細かに丁寧に説明して、と言う方法をとられる場合もあるかも知れませんが……。

また、驚いたのは、この小説に関して、「悲しくて寂しい話」「重い話」と取られる方と「明るい話。現実はそのような訳にはいかない」という反応があったことです。

「明るい」というのはこれは少し驚きました。今のところ「明るい」というのはここに載せていただいた以外の方の反応などでもありません。

老老介護や、末期の方に胃瘻を拵えてまで、という様な現実もありますのでどういふ風に自分が読み、読み入れるかは難しいところです。勿論、介護に疲れ果てて、或いは「安楽死」の囑託殺人を頼むというのも現実にあります。私としましてはラストは願望でもありません。もちろん北欧で始まっているような「安楽死の合法化」が、もし可能な範疇に入れば、それを描く小説も出来るでしょう。今のところはそれを書く、完全に未来の設定ということになるでしょうか。

アクトス通信に書きましたが、書き上げるのは「行きつ戻りつ」です。書いては直し、戻っては書く、「推敲に推敲を重ね」というと格好いいのですが、難儀な話です。妻に3度読ん

で校正してもらいました。添削指導をお願いするとう部分がありませんので、本来、もつと寝かせておけば良いのかも知れませんが。出来れば3年、短くても1年。それくらい経つと自分の見る目が違っているのです。

「まあ、いいか」と大胆に思い切り、読み上げは2度して校正しました。ま、推敲・自己添削・校正が行ったり来たりしたわけです。

刷り上げてみると、余分なスペースが2カ所ありました。もう20部ほど作っていたので、これは、ご批評を受けて手直した際に埋めることにしました。

この冊子を読まれて更にご意見がありましたらお寄せ下さい。
お忙しいところたくさんご批評・感想をいただき本当にありがとうございます。
(亥)

アクトス18号 別冊付録 エスプラネードをこう読む

二〇一三年五月一日発行

発行所 大和評論社 編・著者 大西亥一郎

千六七三ー〇〇三一

兵庫県明石市宮の上ー十七六一四 電話〇七八(九二二) 四五六二

非売品(頒価一〇〇円) ©2013 Ichiro Onishi